

飛鳥時代前半における 備前産須恵器の宮都流入過程

木村 理^{*}・馬場 昌一^{**}・森川 実^{***}

The inflow of Bizen Sue ware into the palace capital in the first half of the Asuka period

KIMURA Osamu^{*}, BABA Masakazu^{**}, and MORIKAWA Minoru^{***}

^{*}Okayama University, Research Institute for the Dynamics of Civilization, Okayama city, Okayama prefecture, 700-8530, Japan

^{**}Sabukaze pottery center, Setouchi city, Okayama prefecture, 701-4301, Japan

^{***}Nara National Research Institute for Cultural Properties, Nara city, Nara prefecture, 630-8577, Japan

Abstract In this paper, we attempt to reconstruct the process by which Bizen Sue ware flowed into the palace capital in the early 7th century, the first half of the Asuka period. Among the large lids collected from the Sazarashi Nakaie Kiln in Setouchi City, Okayama Prefecture, we found one that closely resembles the lids unearthed in the southern part of the Nara Basin, the Asuka Fujiwara area, and it is now clear that Sue ware was supplied to the capital from the Bizen area in the eastern part of Okayama Prefecture. The supply of Sue ware from the Bizen area to the Asuka Fujiwara area may date back to the first half of the Asuka period. It has been suggested that the supply of Sue ware to the imperial capital became active in the latter half of the Asuka period, but the results of this paper clarify that the Bizen area was supplying Sue ware to the palace capital before such large-scale supply began. It is highly likely that the supply of Sue ware to the palace capital in the first half of the Asuka period became the basis for the mass supply seen in the latter half.

Keywords Asuka period, ancient Bizen Sue ware, supply of Sue ware to the imperial capital, production and circulation

はじめに

岡山県瀬戸内市邑久町尻海に位置するさざらし中池窯は、6世紀中葉から平安時代後半まで操業が続いた邑久古窯跡群を構成する1基である。2021年11月に筆者の一人である馬場が類例調査のために当窯の資料を含め、邑久古窯跡群の須恵器と飛鳥藤原地域の土器との比較を行った。その結果、さざらし中池窯の須恵器蓋の中に、飛鳥藤原地域で出土した資料に酷似するものが存在することがわかった。

生産地と消費地の関係を念頭に置いた議論がいつそ

う重要性を増している7世紀の土器研究にとって、生産地であるさざらし中池窯の資料と消費地である飛鳥藤原地域の資料は、当該期における土器の生産流通関係を復元する手がかりになろう。

そこで、本稿では当該期における備前産須恵器の流通動向を探る手がかりとなる、さざらし中池窯の特徴的な須恵器蓋について新たに報告する。同時に、飛鳥藤原地域における類例を集成し、SfM/MVS手法に基づいて新たに図化作業を実施する。そのうえで、これらの蓋について共伴する資料の検討から製作時期の特定を行い、系譜や当該期における備前産須恵器の宮都への流入時期

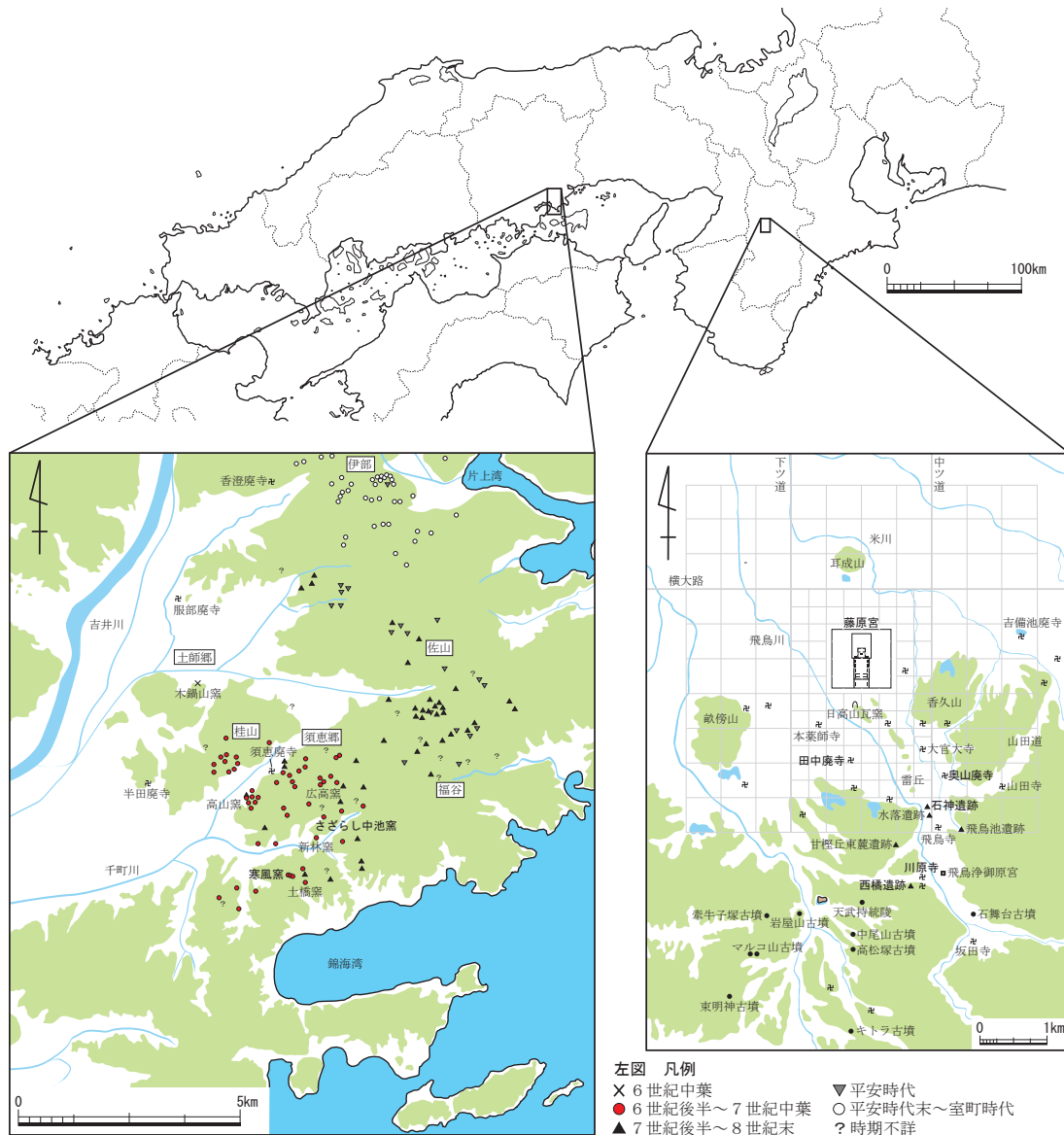


図1 本稿で対象とする地域と遺跡

を復元する。

1. 大型施文蓋の報告

さざらし中池窯では、口縁部外端径が20cmと大型で、外面に列点文や沈線などの文様を有する特徴的な須恵器蓋が存在することが新たに判明した。また、同様の個体は飛鳥藤原地域においても数例が出土しており、その特徴的な形態、製作技法、胎土からさざらし中池窯をはじめとする備前産の製品である可能性が高い。以下では、備前産須恵器の宮都への流入状況を復元するうえで大きな手がかりとなるこれらの資料を対象として、検討を進めたい。

なお、上記の特徴を有する須恵器蓋を本稿では「大型施文蓋」と呼称し、さざらし中池窯の資料と飛鳥藤原地域の類例をあわせ、5点を集成・図化した(図2)。

(1) さざらし中池窯の採集資料

さざらし中池窯は、標高約160mの広高山を水源とするサザラシ川の水を利用したため池の近隣に位置する。設けられた3ヶ所のため池は上流から、さざらし奥池・さざらし中池・さざらし池と呼称され、中間に位置するのがさざらし中池である。窯は、さざらし中池の堤の西側、標高約55mの南東向きの斜面に存在すると推定され、付近には窯壁、須恵器片が散布しているが、窯本体は未確認であ

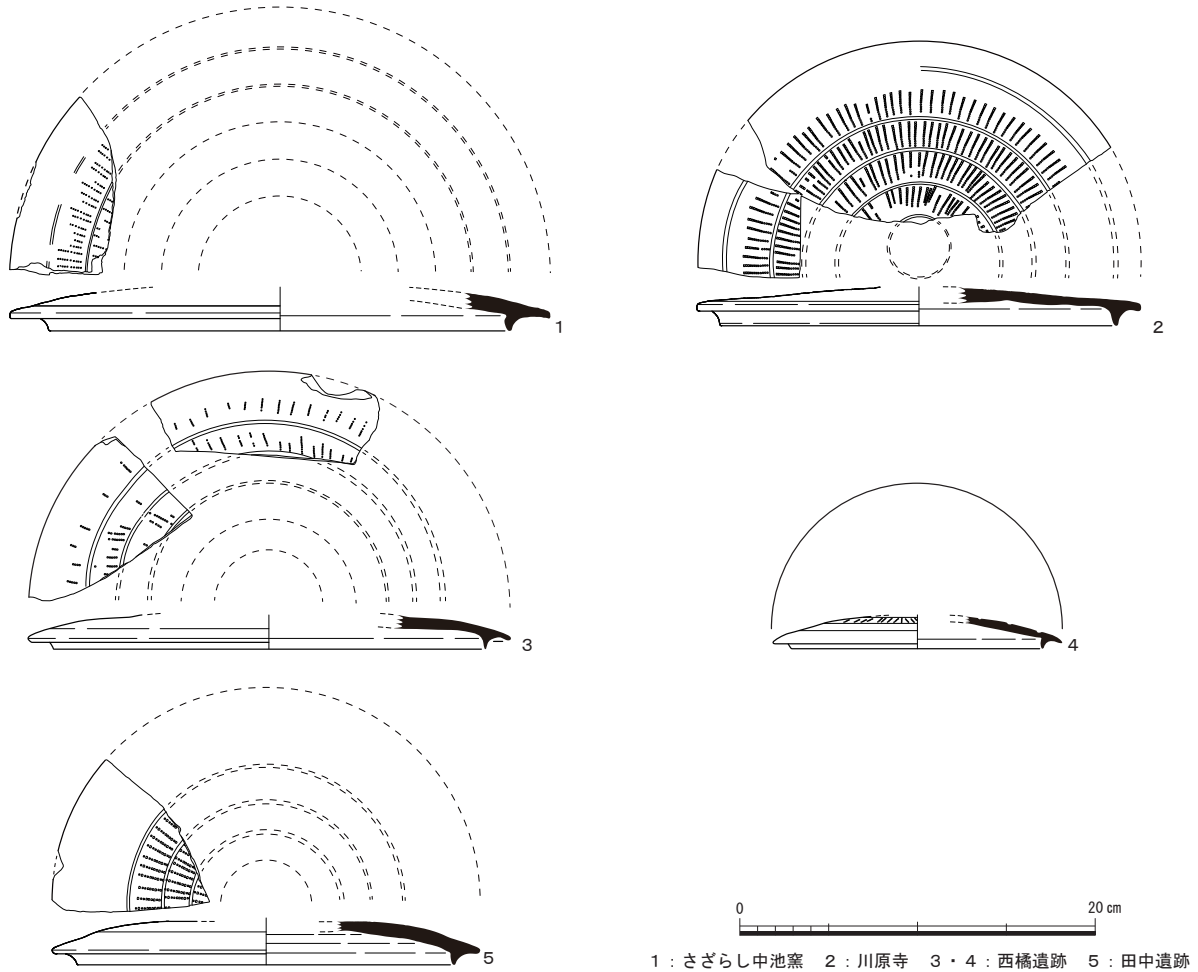


図2 大型施文蓋の諸例

る。窯は、寒風窯の北東約 1.5km に位置する。

当窯の大型施文蓋は「時實コレクション」と呼称される、郷土史研究者の時實黙水〔本名：和一〕(1896～1993) 氏の採集資料のうちに含まれるものである。

時實黙水氏は、邑久郡長浜村（現：瀬戸内市牛窓町長浜）で生まれ、長年の農業で鍛えられた足腰と抜群の記憶力で非凡な才能を発揮した。昭和 10（1935）年、寒風古窯跡群（以下：寒風窯）で杯蓋を採集したことから生涯にわたり寒風窯を主に邑久古窯跡群の須恵器研究と報告を続けるとともに窯の保護に努めた。採集した資料は、黄島貝塚の縄文土器、寒風窯の須恵器や鷗尾、牛窓天神山古墳の埴輪、師楽遺跡の製塩土器等数万点に及ぶもので「時實コレクション」と呼ばれる。特に、寒風窯の須恵器には出土年月日、出土地の地番、地表からの深さなどが克明に墨で注記されており、須恵器がどの窯跡に伴うものか知ることができる。

図 1 は、「時實コレクション」に含まれるさざらし中池窯

の採集資料。鉛直方向に伸びるかえりを有し、外面には 10 点 1 対の列点文と、その外縁を画する沈線からなる文様帯が 2 段分遺存する。復元外端径 30.4cm、復元受部径 25.8cm だが、残存率は 1/8 であるためやや不確実性を残す。胎土中には径 1mm 程度の黒色粒を多量に含む。黄灰色を呈し、外面の広範囲に自然釉が付着する。

（2）飛鳥藤原地域の出土資料

飛鳥藤原地域は、奈良盆地南部、現在の橿原市南部～明日香村にかけての範囲を便宜的に呼称したもので、古代宮都をはじめ国家形成期における重要施設が集中していたエリアである。宮都や有力寺院が集中する当地域には、モノ・人・情報が集積し、とりわけ飛鳥Ⅳ以降に各所から大量の土器が流入する（尾野・森川・大澤 2016・2017、尾野 2018 など）。製品の巨大な集積地の様相を呈していた当地域では、川原寺や西橋遺跡、田中遺跡において大型施文蓋が出土している。

図 2-2 は、川原寺の寺域西南部の調査（1996－2 次：

奈良文化財研究所 1997) で検出された、斜行溝 SD367 の中層資料。報告時に図 62-67 としてすでに掲載されているが、同一個体と思われる破片がのちにみつかったこと、SfM/MVS 手法に基づくより精細な図化が可能になったことを受けて再実測した。

個体は、鉛直方向に伸びるかえりを有し、扁平な器形を呈する。外面には、端部付近まで丁寧にケズリ調整を施し、12 点 1 対の列点文と、それを画する沈線を 5 条めぐらす。復元外端径 25.0cm、復元受部径 22.3cm。胎土に径 1 mm 程度の黒色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色。外面の広範囲に自然釉が付着する中、直径 7.5cm ほどの円形状に釉の付着しない箇所が認められる。

3・4 は、飛鳥京跡の南西約 0.9km に位置する西橘遺跡の出土資料(相原 2019)。いずれも谷 1 出土で、鉛直方向に伸びるかえりを有し、扁平な器形を呈する。そのうち、3 は復元外端径 27.1cm、復元受部径 24.3cm に復元できる。焼成は良好で、色調は灰色、外面全体に濃緑色の自然釉が厚く付着する。外面には列点文と区画沈線からなる文様が付されるが、最外周の区画沈線は省略される。他方、4 は復元外端径 16.3cm、復元受部径 14.1cm を測る。上記の各個体に比べて小型だが、残存率が著しく低いため、やや不正確な値である。外面には列点文とそれを画する沈線がめぐるが、最外周の区画沈線の内部には列点文が付されない。

5 は、藤原宮の南方約 1.5km に位置する田中遺跡の出土資料。1976 年の調査において、包含層より出土した(奈良文化財研究所 1976)。個体は、鉛直方向に伸びるかえりを有し、頂部にむかってやや丸みを帯びる器形を呈する。外面に 10 点 1 対の列点文と、その外縁を画する沈線からなる文様帯が 3 段分遺存する。外端径 24.1cm、受部径 21.2cm に復元できるが、残存率は 1/8 程度であり、不確実性を残す。色調は灰色で、内面には墨書が、外面には墨の痕跡が認められる。さざらし中池窯や川原寺の資料に比べ、器形が丸みをもつことに加え、色調がやや暗く、自然釉の付着が認められない点特徴的である。

以上、大型施文蓋の各例を集成し、新たに図化したものを含めて概要を報告した。改めて各資料をみると、口縁部外端径が 20cm を越えるものが多く、かつ外面に列点文と区画沈線をめぐらせるという特徴を有することがわかる。また、多くの資料は扁平な器形を呈し、かえりがほぼ垂直になる点も特筆される。これらを踏まえて、続いて

は各資料の時期的位置づけについて検討しよう。

2. 大型施文蓋の製作時期

大型施文蓋は資料が少なく、単体での自立的な編年を構築することは困難に近い。また、後述する通り、これらは現状の資料による限り比較的短期間に集中的に生産された可能性が見込まれる。そこで、その製作時期については共伴資料を参考にしたい。なお、各資料の編年の位置づけに際しては、奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019『飛鳥時代の土器編年再考』に依拠する。

まず、さざらし中池窯の資料について、『邑久町史考古編 2006』へ掲載されている資料に加えて、新たに時實氏により灰原で採集された「時實コレクション」の資料を図化した(図 3・表 1)。

採集された器種は、杯 H、杯蓋、高杯、短頸壺蓋、平瓶、甕である。そのうち、杯 H は、外端径 10.6 ~ 11.8cm、受部径 10cm 前後を測り、底部はヘラ切り無調整の個体で占められる。立ち上がりは、いずれも受け部よりもわずかに高く、形状は内彎気味である。杯蓋は口径 10.2cm、天井部はヘラ切り無調整である。杯 G 蓋の形態に近似するが、天井部につまみを付さない。なお、同形態の蓋は寒風 1 - II 号窯灰原でも出土している。

短頸壺の蓋は 3 個体が出土しており、口径 7 ~ 9 cm 程度を測る。いずれも頂部にヘラ記号が付され、「Y」状や「×」状、「大」字状のものが見受けられる。類例として、寒風 2 号窯の「×」、ばがせ窯の「十」のヘラ記号が挙げられる。このように、邑久古窯跡群で採集・出土した短頸壺蓋は、数量の僅少さに比してヘラ記号を施す個体が多い。甕は、口縁部外面をやや肥厚させる。短頸壺蓋と同様にヘラ記号を付すものが一定数存在し、口縁部内面に横方向に 1 条、縦方向に 4 条で構成されるヘラ記号を施すものや、口縁外面に縦方向に 4 条、斜め方向に 1 条で構成されるヘラ記号を施すものが見受けられる。そのほか、内面に車輪文当て具痕をもつ個体も認められる。

時期的な位置づけをめぐる、杯 H は同じ邑久古窯跡群の寒風 1 - II 号窯床面の資料と類似しており、外端径は 10.8 ~ 11.9cm、受部径 10.0 ~ 10.8cm を測る。ただし、寒風 1 - II 号窯の床面資料では、受部外端より立ち上がりが低い例も認められ、さざらし中池窯の杯 H と比べ立ち上がりの退化が進んでいて、新相を示す。飛鳥藤原地域の基準資料との比較では、飛鳥 I 新相に位置づけられ

表1 さざらし中池窯採集資料観察表

番号	器質	器種	色調	口径 (cm)	口縁残存 率(%)	底径 (cm)	底部 残存率	器高 (cm)	備考
1	須恵器	無紐杯蓋	灰 N5/0	10.2	360	—	—	2.5	頂部へラ切り無調整、焼きひずみ顕著
2	須恵器	杯H	—	10.6	—	—	—	2.8	外端径
3	須恵器	杯H	灰白 2.5Y8/1	11.8	320	—	—	3.3	へラ切り無調整。やや軟質
4	須恵器	杯H	灰 N5/0	—	—	—	—	—	細片
5	須恵器	杯H	灰 N5/0	—	—	—	—	—	細片
6	須恵器	高杯	灰 N5/0	11.6	35	—	—	—	脚部内面ケズリ、焼きひずみ顕著
7	須恵器	壺蓋	灰 N4/0	8.4	150	—	—	3.3	頂部へラ切り無調整、へラ記号あり
8	須恵器	壺蓋	灰 N5/0	9.0	180	—	—	3.7	外面ケズリ（ロクロ反時計回り）焼きひずみ顕著
9	須恵器	壺蓋	灰 N4/0	—	—	—	—	—	焼きひずみ顕著、焼きひずみ顕著
10	須恵器	平瓶	灰 N5/0	7.0	30	—	—	—	肩部へラ記号あり、風船技法
11	須恵器	甕	灰 N5/0	22.4	—	—	—	—	—
12	須恵器	甕	灰 N5/0	—	—	—	—	—	内外面とも自然釉薬顕著、内面へラ記号あり
13	須恵器	甕	灰 N5/0	—	—	—	—	—	外面カキメ、内面当具痕
14	須恵器	甕	灰 N5/0	—	—	—	—	—	外面カキメ、内面当具痕
15	須恵器	甕	灰 N4/0	22.0	40	—	—	—	外面カキメ、内面当具痕、へラ記号あり

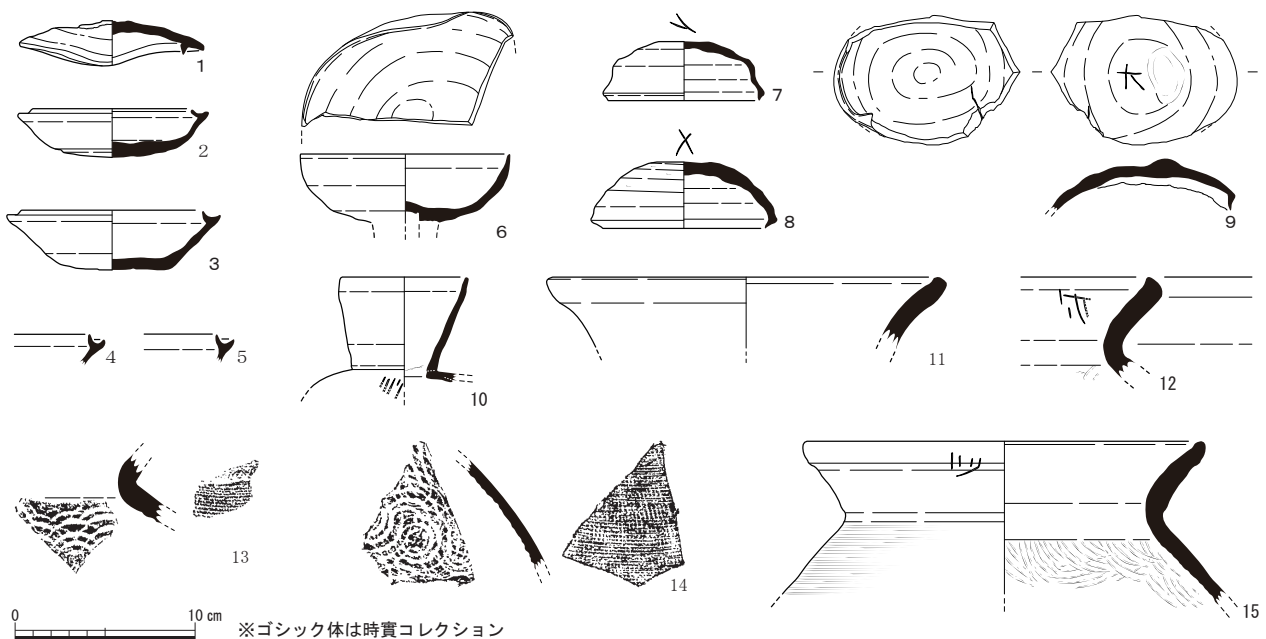


図3 さざらし中池窯採集資料

る甘樫丘東麓遺跡 SK184 の杯Hがやや小径の2点を除き外端径 10.4 ~ 10.7cm、受部径 10.1 ~ 10.7cmを測り、近似した値を示す。短頸壺蓋など大官大寺 SK121 の資料に類似した個体を一部に含むものの、おおむね飛鳥 I 新相に位置づけられよう。

続いて、川原寺 SD367 にかんして、大型施文蓋が出土した中層および、その下限を示しうる資料である上層の遺物を検討する。それに際し、新たに 19 点を図化した(図4・表2)¹⁾。これらを既報告資料と総合すると、SD367 中層の土器は、土師器杯Cが径高指数 31 ~ 35 程度となるほか、須恵器杯Hが外端径 10.5 ~ 12.5cm 程度、同蓋が口径 11.0 ~ 12.5cm 程度、須恵器杯Gが口径 9.5cm 前後、同蓋が外端径 10.5 ~ 12.5cm 程度を

測る。同様の特徴を備える資料群は、飛鳥 I 新相に比定される飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層(奈良文化財研究所 1992 など)や甘樫丘東麓遺跡 SK184 で出土している。とりわけ、SD367 中層資料と甘樫丘東麓遺跡 SK184 の資料では、各器種のサイズのみならず、口縁端部の巻き込みがない土師器皿Aを少量含む点や、蓋Xと呼称される、突出の高いボタン形のつまみを有する土師器蓋を含むといった組成面でも共通性が高い。資料は依然として少量だが、これらを総合すれば、SD367 中層資料も同様に飛鳥 I 新相に位置づけて差し支えなからう。この点は、層位的に古く位置づけられる SD367 下層の土器群が飛鳥 I 中相に比定されること(奈文研・歴土研 2019)とも整合的である。

対して、これら中層資料の下限を示しうる上層資料は、須恵器杯Hが外端径 10.5cm 前後、同蓋が口径 11.0cm、須恵器杯G 蓋が外端径 10.0 ~ 11.5cm 程度を測る。土師器杯Cに深手のものを含むこと、須恵器杯Gが口径 9 cm 前後を測るなど小型であることは留意されるが、土師器の杯Bや皿B、口縁端部に巻き込みを有する杯Aの存在も考慮すると、飛鳥Ⅲに位置づけられる大官大寺下層 SK121 の資料が様相的には最も類似するといえる。これは、上記の大型施文蓋を含む SD367 中層資料の位置づけともやはり矛盾はない。

やや長くなったが、次に西橋遺跡の谷 1 の資料については、相原嘉之によって各器種の詳細な検討がすでになされ、飛鳥Ⅱに位置づけられる坂田寺 SG100 の例より

新しく、上述の大官大寺 SK121 の例より古相を呈するという比定がなされている（相原 2019）。この理解に基づけば、共伴する 2 点の大型施文蓋についても同様の編年の位置づけが与えられよう。

最後に、田中遺跡の資料は包含層出土品であるため、正確な時期比定が困難である。一方で、特徴的な文様構成や形態的な類似性から考えて、上記 4 個体と同時期に比定できる公算が高い。実際、当調査で出土した土器は総じて飛鳥時代前半期に位置づけられる。以下、その時期比定に矛盾がないか検証するために、同じ調査区内で検出され、古代の土器がまとめて出土した南北溝 SD055 の土器を検討してみよう（図 5・表 3）。

SD055 は 1976 年の調査において、調査区の西端で

表 2 川原寺 SD367 出土資料観察表

番号	器質	器種	色調	口径 (cm)	口縁残存 率(%)	底径 (cm)	底部 残存率	器高 (cm)	備考
1	土師器	杯C	橙 5YR6/6	9.6	122	—	—	—	内面 1 段放射暗文
2	土師器	杯H	橙 5YR6/6	9.7	110	—	—	3.1	
3	土師器	杯H	橙 2.5YR6/6	12.8	360	—	—	4.1	
4	土師器	杯H	にぶい橙 7.5YR7/4	9.7	115	—	—	2.9	
5	土師器	杯C	橙 5YR6/6	11.9	310	—	—	3.7	内面 1 段放射暗文、内外面 2 箇所ずつに線刻あり
6	土師器	杯H	にぶい橙 7.5YR7/4	10.0	93	—	—	2.7	
7	土師器	壺蓋	橙 5YR6/8	15.0	100	—	—	4.4	外面ケズリ、内面摩滅。内外面に黒斑付着
8	須恵器	杯H蓋	灰 N5/0	12.6	88	—	—	4.3	頂部ケズリ（2 周）
9	須恵器	杯H	灰 N4/0	12.8	170	—	—	—	外面ケズリ（ロクロ反時計回り）
10	須恵器	杯H	灰 N5/0	14.2	45	—	—	—	外面ナデ
11	須恵器	杯H	灰 N5/0	10.2	105	—	—	2.9	ヘラ切り無調整
12	須恵器	杯H	灰 N5/0	12.0	360	—	—	4.0	ヘラ切り無調整
13	須恵器	高杯	灰 N6/0	11.7	130	—	—	—	無蓋、外面ごく一部にケズリ
14	土師器	高杯C	橙 7.5YR7/6	14.5	110	—	—	—	外面ケズリ、内面摩滅
15	土師器	碗C	にぶい黄橙 10YR7/3	16.2	210	—	—	6.6	内面に黒斑と板状工具痕、外面指オサエ、ケズリ
16	須恵器	杯H蓋	灰 N4/0	11.0	90	—	—	3.3	ヘラ切り無調整
17	須恵器	杯H	灰 N6/0	10.6	342	—	—	2.9	ヘラ切り無調整
18	須恵器	杯G蓋	灰 N4/0	10.8	75	—	—	2.9	外面自然釉付着
19	須恵器	杯G蓋	灰 N4/0	11.6	135	—	—	—	外面ケズリ（ロクロ時計回り）、口縁部に降灰

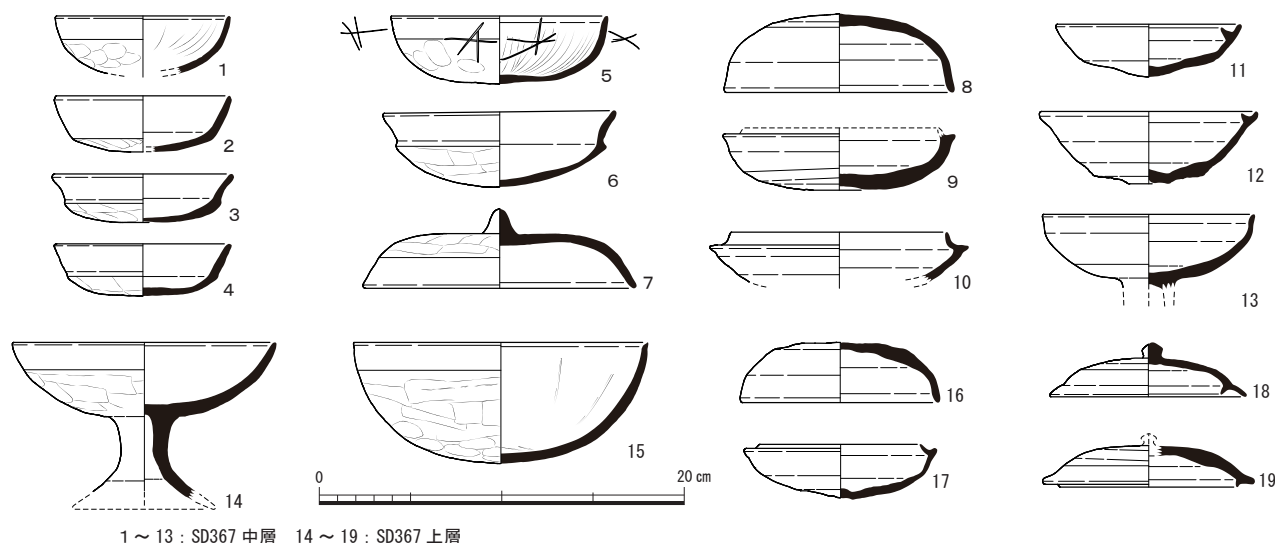


図 4 川原寺 SD367 出土資料

検出された南北溝である。当遺構から出土した土器は概要報告時には未掲載であったが（奈良文化財研究所1976）、上記の大型施文蓋の時期比定を行ううえで重要な資料群であると判断したことから筆者が整理作業を実施し、大型施文蓋とあわせて新たに公表するものである。

出土土器は整理用木箱2箱分におよび、土師器では杯A・C・G・H、高杯C、大型鉢、鉢H、皿A・H、甕などが、須恵器では無台杯、同蓋、杯B、同蓋、甕など

が存在する。また、ロクロ土師器の蓋も少量ながら含まれる。そのうち、土師器杯Cでは径高指数41.1、内面に2段の放射暗文を施すものがごく一部に存在するが、径高指数は総じて26～30である。須恵器無台杯は口径10.0cm程度、杯Bは口径15cm程度を測り、無台のものと同有台のものとサイズに明確な違いがある。このように、SD055出土土器は各器種のサイズや須恵器杯Bを含む組成から、基本的には川原寺SD367上層と同様、

表3 田中遺跡 SD055 出土資料観察表

番号	器質	器種	色調	口径 (cm)	口縁残 存率(%)	底径 (cm)	底部 残存率	器高 (cm)	備考
1	土師器	杯G	にぶい黄 2.5Y6/4	8.9	75	—	—	2.2	内面の全面に漆付着
2	土師器	杯G	にぶい橙 7.5YR6/4	10.3	65	—	—	—	Gb型式
3	土師器	杯C	橙 5YR6/8	10.4	58	—	—	2.4	内面1段放射暗文、内外面とも摩滅
4	土師器	杯C	にぶい褐 7.5YR6/3	11.8	70	—	—	—	内面1段放射暗文
5	土師器	杯G	橙 5YR7/6	12.2	53	—	—	—	外面の粘土接合痕は右上がり、内面板状工具痕
6	土師器	杯C	明赤褐 5YR5/6	12.9	90	—	—	5.3	内面2段放射暗文・ループ文、口縁端部肥厚
7	土師器	杯A	にぶい赤褐 5YR5/4	18.6	66	—	—	—	内面2段放射暗文、口縁部巻き込みあり
8	土師器	杯C	橙 5YR6/6	15.9	103	—	—	—	内面1段放射暗文、口縁部ナデ時計回りに抜ける
9	土師器	杯C	橙 5YR6/6	16.8	50	—	—	4.8	内面1段放射暗文
10	土師器	杯C	にぶい橙 7.5YR7/4	16.7	130	—	—	4.8	内面1段放射暗文、底面に木葉痕
11	土師器	鉢A	橙 5YR6/8	28.7	81	—	—	7.2	内面暗文、外面ケズリ・ミガキ、外面底部に線刻
12	土師器	皿A	浅黄橙 10YR8/3	22.0	40	—	—	3.5	口縁部巻き込まず、内面1段放射暗文
13	土師器	皿H	にぶい橙 7.5YR6/4	22.8	67	—	—	3.9	
14	土師器	皿H	にぶい黄橙 10YR6/3	19.7	55	—	—	2.6	
15	土師器	皿H	にぶい橙 7.5YR7/4	20.9	78	—	—	3.5	
16	土師器	甕A	橙 5YR6/8	21.1	85	—	—	—	把手の有無不明
17	須恵器	無台杯蓋	白灰 N8/0	12.0	38	—	—	3.1	ヘラケズリはロクロ時計回り、外面に降灰
18	須恵器	杯B蓋	灰 N6/0	16.8	59	—	—	—	ヘラケズリはロクロ時計回り
19	須恵器	杯B蓋	白灰 N7/0	18.1	40	—	—	3.8	ヘラケズリはロクロ時計回り
20	須恵器	無台杯	白灰 N7/0	10.0	148	6.7	60	3.7	内面漆付着、外面にもわずかに飛沫あり
21	須恵器	杯B	灰 N6/0	15.1	88	9.6	60	4.1	
22	須恵器	杯B	灰 N6/0	12.0	93	11.5	55	4.5	

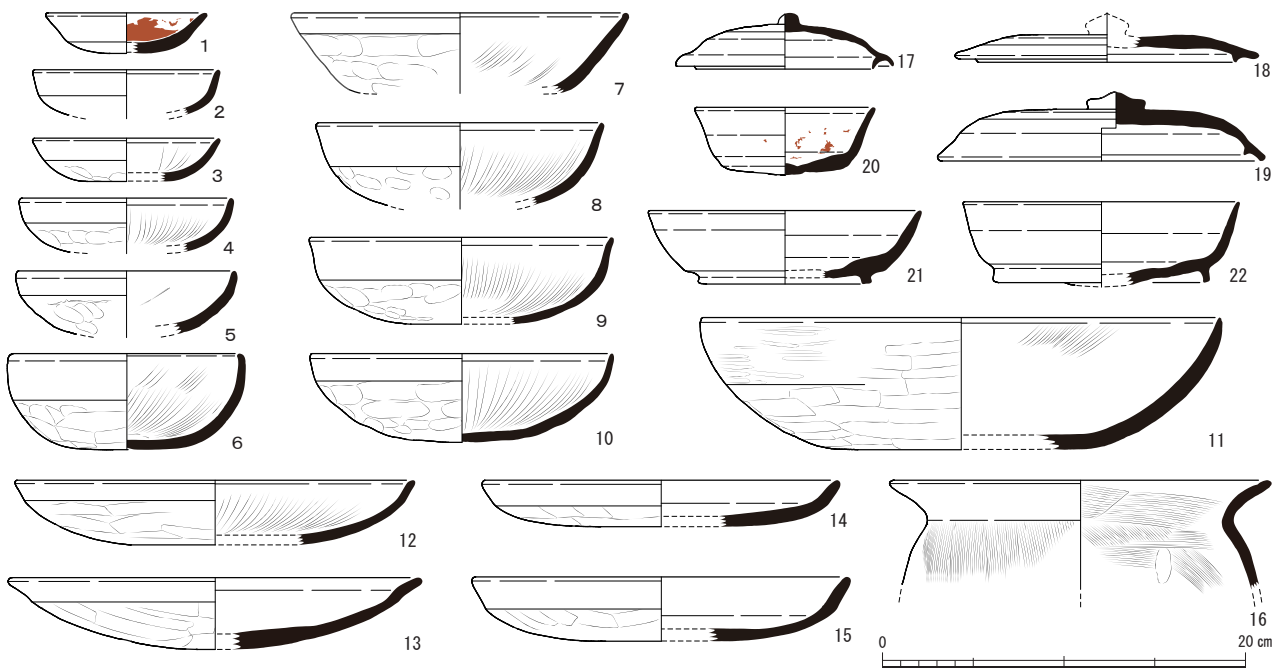


図5 田中遺跡 SD055 出土資料

大官大寺 SK121 の資料群と同時期に位置づけられ、時期幅を広く見積もっても飛鳥Ⅰ～Ⅲに収まると理解可能である²⁾。上述の大型施文蓋の時期を直接的に示しているわけではない点には十分に留意すべきだが、類例から導かれた時期比定に矛盾しないことは強調しておく。

以上、前節で報告した大型施文蓋にかんして、伴伴資料からそれぞれの時期的位置づけを試みた。出土遺構を正確に把握しえないものもあるが、各資料はいずれも飛鳥Ⅰ新相～飛鳥Ⅱ、長く見積もっても飛鳥Ⅲまでの限られた時間幅におさまることがわかる³⁾。大型施文蓋がすべてかえり付きの資料で占められる点も、この理解と整合的である。依然として類例に乏しいものの、時期的な偏在性を伴って、飛鳥時代のおおむね前半期の土器様式に組み込まれた存在であったことを指摘しておきたい。

3. 大型施文蓋の製作技法と系譜的位置づけ

ここまで、大型施文蓋がそれぞれ近接した時期に位置づけられることを明らかにしてきた。続いては、各資料の相互比較を通じて、生産地・消費地の関係性や製作技法の近似性について検討する。また、当該器種を評価するうえで、その系譜についても理解を深める必要がある。それにあたって、古墳時代後期にまでさかのぼって類例を探りたい。

(1) 生産地の推定と製作技法

まず、上記の大型施文蓋のうち、さざらし中池窯および川原寺、西橋遺跡の資料は、黒色粒を含む胎土、やや明るい灰色を呈する色調、硬質焼成で外面全体への自然釉の付着といった諸特徴をともにする(図6)。類例の僅少さに加えて、胎土や色調、焼成における高い類似性を勘案する限り、これらはいずれも同様の生産地、すなわち備前産である蓋然性がすこぶる高い。

なお、田中遺跡の資料は上記4例に比べてやや暗い灰色を呈し、自然釉がまったく付着しないなど様相を異にする。また、本稿で挙げた資料の中でやや小型である点や、器形がわずかに丸みを帯びる点も踏まえれば、当個体については他地域産とみなすべきかもしれない。

このように、大型施文蓋は一部に他地域産とみられる資料を含むものの、その多くはさざらし中池窯資料と高い共通性をもち、備前地域で製作されたものと推定して差し支えない。その詳細は理化学分析などを踏まえたさらなる検証を必要とするが、いずれにしても、これらは類例が少ない中で高い共通性を備えること、上で指摘し

たように時期的な偏在性を有していることに鑑みれば、きわめて近い関係の下で製作されたことはほぼ間違いない。それを物語るのが、外面に配された文様の施文方法である。

各個体とも、列点文と沈線からなる文様を有する点で高い類似性を見せるのは上述の通りだが、子細に観察するとそうした文様の構成だけでなく文様規格においても酷似することがわかる。残存状況に恵まれている川原寺の資料を例にとって検討すると、沈線によって画される各段の幅は、基本的に列点文の幅と合致するように割り付けられる中、最外周の沈線のみ列点文よりも大きく外側に配されるという特徴を有している。

また、内側の列点文は沈線に重複することから、内側では区画沈線→列点文の順に文様が描かれたとみられるが、あたかも列点文を避けるように大きく幅がとられる最外周については、列点文を付したのちに沈線が配された可能性もある。自然釉の付着により器面が荒れているとはいえ、最外周の沈線のみ稜が弱く、施行のタイミングや使用工具が異なっていた可能性を想定させる点もこれに整合的である。この可能性を容れるとすれば、当個体の文様は、内側区画沈線→各段の列点文→最外周沈線といった独特な手順を踏んでいたことが推測できる。文様手順の可否は措くとしても、最外周の沈線のみがほかと比べて、沈線間の間隔が広く、また列点文よりも大きく外方に付される点は特徴的である。

これを踏まえたうえでほかの個体も観察すると、さざらし中池窯、田中遺跡の資料も同様の特徴を有していることに気づく。すなわち、両者とも最外周の沈線のみ、ほかの沈線間よりも間隔が広く、そして列点文よりも大きく外方に配されているのである。こうした細部にいたるまでの高い類似性は、それぞれが互いに無関係に製作されたものでないことを強く示している。かえりの位置や列点文施文工具の相違を考慮すると、同一工人の作によるとはみなせないが、きわめて近い関係で製作された個体群とみて差し支えなからう。

また、西橋遺跡の資料は、外周の列点文が省略される点や、沈線の外側に列点文が配される点において様相を異にするようにも映るが、特に後者はほかの個体でいうところの最外周の沈線が省略された姿として捉えることも不可能ではない。こうした点は、最外周の沈線のみ施文のタイミングを違えていた可能性を想定した上の理解とも適合的である。様相をやや異にしてはいるものの、



1 : さざらし中池窯 2 : 西橘遺跡 3 : 田中遺跡 4 : 川原寺
※縮尺任意

図6 大型施文蓋の色調と施文方法

上記の文様規格・手順の中で理解できる範疇といえる。

以上、焼成や胎土、色調のみならず、文様構成も合わせた検討を実施し、取り上げた各個体がきわめて近い関係で製作されていた可能性に言及した。重要なのは、さざらし中池窯の表採資料が如実に示すように、それらのうちの多くが備前産と特定しうることである。飛鳥藤原地域における他地域産須恵器については近年精力的に検討が進められ、飛鳥Ⅳを境に大量供給がなされることが判明しつつある（尾野・森川・大澤 2016・2017、尾野 2018 など）。こうした中で、飛鳥藤原地域における大型施文蓋が、備前産かつ飛鳥時代前半期に位置づけられる意義は小さくない。すなわち、大型施文蓋の存在からは、大量供給以前に散発的ながらも宮都への供給を念頭に置いた須恵器生産が備前地域においてすでに実施されていた可能性がうかがえるのである。

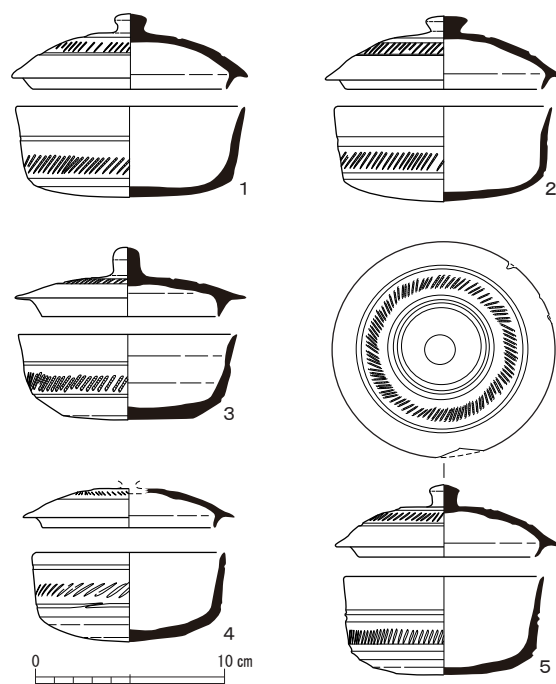
言い換えれば、飛鳥Ⅳにおける宮都への大規模な供給は突如として生じたものではなく、その素地は飛鳥時代前半期においてすでに整えられていたのではなかろうか。備前産であることがほぼ確実視される大型施文蓋は、宮都への大量供給以前における備前産須恵器の流入状況を如実に示しているようにも思われる。

（2）系譜と性格

ここまで、大型施文蓋の時期的位置づけや焼成、胎土、色調、文様についての分析を実施し、その多くに対して比較的限られた時期に製作された、備前産の製品という評価を与えた。一方で、各資料はそれに組み合う身を伴っておらず、器種的な位置づけや系譜、性格が不明確である。推論の域を出ないが、最後に現状での予察を示しておきたい。

まず系譜にかんして、結論的にいえば筆者は TK209～飛鳥Ⅰ古相にかけてみられる、「装飾碗」の蓋に系譜を求めると考えている。「装飾碗」とは、外面に沈線と列点文からなる文様を付した碗・杯の総称で、古墳時代の無蓋高杯と金属器の要素が複合して出現した器種である（森 2018）。製作時期は森暢郎が整理する通り、TK209 型式期を中心としていたとみられ、TK217 の古相にいたるまで少数認められる。典型例としては、難波宮 NW08-3 次谷第 8-6 層の資料や、大阪府・平尾山古墳群中の平野大泉第 20 支群 3 号墳、岡山県・王墓山古墳、川戸 2 号墳の資料が挙げられる（図 7）。

筆者が「装飾碗」に注目しているのは、それに組み合う蓋が、かえり付きで、体部に列点文と沈線からなる



1・2：王墓山古墳 3：川戸 2 号墳
4：難波宮 NW08-3 次谷第 8-6 層
5：平尾山古墳群・平野大泉第 20 支群 3 号墳

図 7 装飾碗の諸例

文様を有するといった、上述の大型施文蓋と同様の特徴を備えるためである。また、「装飾碗」は有力古墳や難波宮などの有力遺跡で出土する傾向にあるが（宇垣 1995、森 2018）、大型施文蓋も現状限られた遺跡でのみ確認できる、特殊品としての性格を帯びている。さらに興味深いことに、この「装飾碗」は近畿中央部と吉備地域に主として分布するという（森 2018）。このように、「装飾碗」の蓋と大型施文蓋の間には、形態・文様における類似性のみならず分布傾向の共通性といった様々な同一性が見て取れる。

無論、大型施文蓋が製作された飛鳥Ⅰ新相～飛鳥Ⅱにおいても、壺などの肩部に沈線と列点文からなる文様を付す場合もあり、そうした器種からの文様の転用も十分に考慮すべきといえる。その意味で、大型施文蓋の系譜を特定の器種に限定するわけにはいかないが、上記の諸点を鑑みると、古墳時代段階から存在していた「装飾碗」に主たる系譜を求めることも十分に可能であろう。つまり、古墳時代以来の器種である「装飾碗」が大型化を経て、引き続き特殊品として製作された可能性を想定するわけである。

なお、大型施文蓋の系譜を「装飾碗」の蓋に求めるならば、それに組み合う身にも沈線と列点文が付されてい

た蓋然性が高い。そうした資料は現時点で見出せてはいないが、サイズから考えて器種としては皿や鉢などがその候補となろう。

以上、大型施文蓋の系譜について検討を行ったが、最後に出土遺跡の性格から当該器種の役割について予察しておく。生産地の資料であるさざらし中池窯の例を除いて、各資料を概観すると、いずれも宮あるいは寺院関連遺跡での出土が現状顕著である。

例えば、川原寺 SD367 中層の資料は、飛鳥 I 新相に位置づけられるが、その仮定歴年代が 645～660 年頃に比定できるとすれば（尾野 2019）、655 年に一時的に用いられた斉明天皇の川原宮の年代観と合致する。SD367 の東延長部である SD02 において、多量の鍛冶関連遺物が出土していることは留意されるが、川原宮やその関連工房に伴うものであった可能性がある。

西橋遺跡の資料についても、当遺跡が橘寺旧境内に西接し、とりわけ大型施文蓋が出土した調査区は、谷 1 の中でもまさに橘寺の旧境内に隣接するという位置関係にある。また、田中遺跡例についても、SD055 の資料群を参考にすれば 636 年造営とされる舒明天皇の田中宮に後出することが明らかである中、その廃絶後に創建された田中廃寺との関連を推測するのも不可能ではない。

このように、各資料とも出土遺跡・遺構の性格づけにはなお検討の余地を残すが、宮や寺院関連地での出土が現状顕著であることには注目してよいだろう。出土数自体がそもそも僅少である点と合わせて、宮や寺院などの特殊施設での使用を基本としていたことが示唆されるのである。また、こうした傾向は、当該器種と系譜的につながりうる「装飾碗」が、有力古墳を中心として認められていた事実に適格的といえる。古墳時代における階層に応じた土器の使用方式が、続く飛鳥時代においていかに再編成されたのか、重要な論点となるが、本稿で報告した大型須恵器蓋はその一端を示しているように思われる。

なお、このように古墳時代以来の土器に系譜を求める器種が、飛鳥 II あるいは III を下限として減衰していくことは興味深い。杯や皿などからなる通有の供膳具も飛鳥時代の半ばを境に古墳時代的様相を減じていくが（西 1982、小田 2012）、このような特殊品もまた例外ではなかったのである。

4. 備前産須恵器の宮都流入過程をめぐる予察

大型施文蓋に焦点をあてて、その多くが備前産須恵器

である点、そしてそれらが飛鳥時代前半の時点で備前産須恵器が宮都へ供給されていたことを示す有力な手がかりになる点などを指摘してきた。以下では、上記の議論を踏まえつつ、飛鳥時代後半の様相も含めて備前産須恵器の、飛鳥藤原地域への流入過程について素描したい。

飛鳥 I 古相～中相の時点では全体的な資料数の少なさも相まって、備前産と特定できる須恵器は見出しがたいが、続く飛鳥 I 新相～II にかけては上記で検討した大型施文蓋が示すように、備前産須恵器の宮都への供給が始まった可能性がきわめて高い⁴⁾。また、これが飛鳥時代後半における大量供給の下地になったとみられることは、すでに述べた通りである。

この段階に宮都への供給を担った生産地がさざらし中池窯であることは言を俟たないが、同時期に操業していた寒風古窯跡群や新林（宮嶋）窯などもまた候補に挙げることができる。とりわけ、飛鳥 I 新相に位置づけられる寒風 1－II 号窯では、区画沈線の中に波状文と列点文を配する大型施文蓋が出土しており（馬場 2022）、上で検討してきた大型施文蓋の類例に加えることができる（図 8）。現時点では様相は不明であるものの、さざらし中池窯を含めて邑久古窯跡群の複数の窯が宮都への供給を担っていた可能性を推測することも不可能ではない。また、さざらし中池窯や寒風古窯跡群など、飛鳥藤原地域へ初期の製品供給を担ったと推測される窯の近隣にさざらし 1 号墳や寒風古墳⁵⁾といった近い時期の古墳が築かれるのも偶然ではなかろう。近在する須恵器窯を

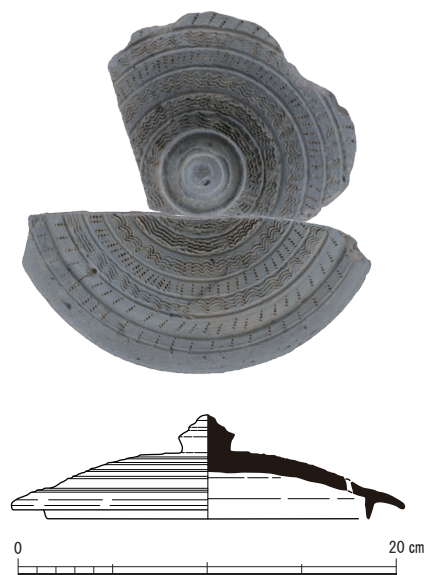


図 8 寒風 1－II 号窯出土の大型施文蓋

統括する程度にとどまるものであったとみられるが、いずれにせよ邑久古窯跡群の中で両窯が中心的な役割を担ったとみなしうる点は、上記想定とも適合的といえる。

ところで、当該期において甘樫丘東麓遺跡 SK184 や水落遺跡 SB200 基壇、西橋遺跡谷 1 の出土須恵器の中に、備前産と思われる資料がごく少量含まれていた可能性も指摘されている（新田 2019）。しかしながら、そのうち甘樫丘東麓遺跡 SK184 の杯 H（小田 2010：図 142－72）は①器壁が薄く、全体にロクロナデが丁寧である点、②蓋受けの内彎の形状が弱い点、③立ち上がり成形時、端部を屈曲し立ち上がりと杯部の境を丁寧にナデ仕上げしている点、④胎土は緻密で若干長石粒子を含む点、⑤色調はやや黄味を帯びた灰白色である点、などにおいて寒風窯の須恵器とはやや異なる特徴を備える。また、水落遺跡 SB200 基壇の杯 G ⁶⁾（奈良国立文化財研究所 1995：PL.37－56）も、①寒風 1－Ⅱ号窯例は端部を丸く仕上げるのに対して、当例は口縁端内面

をロクロナデすることにより薄く仕上げている点、②口縁部の立ち上がりが寒風窯と比べ直立気味である点、③胎土に白色細砂の混入が目立つ点、においてやはり寒風窯の資料は差異がある。さらに、西橋遺跡谷 1 の杯 H 蓋（相原 2019：図 5－59）についても、①内外面、特に外面に成形時のロクロナデによるものか、大きな凸凹を有する点、②口縁端部を明瞭に垂下状に屈曲させる点、③胎土に 1mm 前後の長石粒子を多量に含む点、において寒風窯の資料とは様相を異にする。

備前産須恵器の有する型式学的、理化学的特性の把握をさらに進める必要はあるものの、こうした諸点に鑑みれば、現状では新田の挙げる上記資料については判断を保留しておくのが穏当と考える。ただし、飛鳥 I 新相から少量の備前産須恵器が飛鳥藤原地域に流入するという新田の理解に異論はない。むしろ、本稿で取り上げた大型施文蓋こそが当該期における備前産須恵器の飛鳥藤原地域への流入を確実視させるものとして重要である。

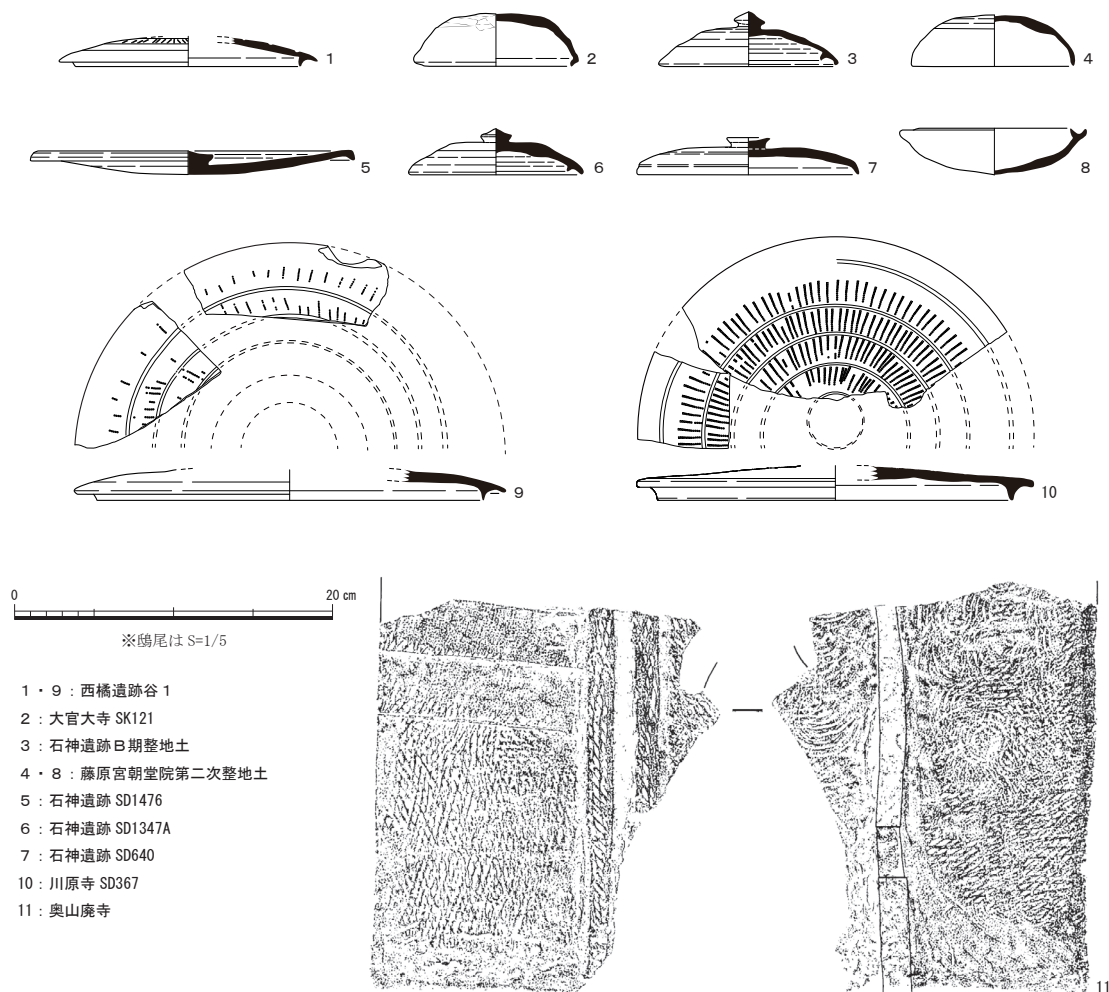


図9 飛鳥藤原地域における推定備前産須恵器等

さて、続く飛鳥Ⅳを前後する時期になると、先学の指摘の通り、飛鳥藤原地域における備前産須恵器の量が急増する（新田 2019 など）。すなわち、藤原宮朝堂院第二次整地土や石神遺跡 B 期整地土、同 SD640 では蓋を中心に一定数の個体が備前産として認定されている。これらの中には、藤原宮の造営に従事した役民の器である可能性が示唆されるものも含むが（尾野 2018）、飛鳥時代前半に比べて数量の増加は明らかであり、宮都へ向けた生産が本格化したものとみて大過ない。また、尾野や新田が指摘した個体以外でも、石神遺跡の各所（SD1347A・SD1476・B 期整地土）からは飛鳥Ⅳに比定される備前産須恵器が抽出されており（馬場 2022）、認定が困難な個体や未発見の個体を考慮すれば、本来的にその数は相当数にのぼると見込まれる。

なお、石神遺跡の北方約 700 m に位置する奥山廃寺では、寒風古窯跡群で生産されたとみられる鴟尾がみつかっており（箱崎・西川 2002、大脇 2007）、胎土分析からもそれが裏づけられている（道上ほか 2022）。当資料は飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置づけられる寒風Ⅰ－Ⅰ号窯で焼成された、大脇分類の A－Ⅰ型式に属するものであり（大脇ほか 1980）、当該期に土器だけでなく屋根瓦も含めて宮都での需要を満たすべく備前産の製品がもたらされたことを想定しうる。

以上、先学に学びつつ、とりわけ飛鳥時代前半における動向に目を配りながら備前産須恵器の飛鳥藤原地域への流入過程を概観した。改めて述べるまでもなく、流入の大きな画期が宮都での需要増加がみられる飛鳥浄御原宮期（≡飛鳥Ⅳ）に求められることは揺るぎない。当該期には宮都での需要に応える形で東海地域などからも大量に製品がもたらされたことが判明しており（尾野・森川・大澤 2016・2017）、備前産須恵器も同様の脈絡の中で理解することが可能である。

そうした中、本稿では飛鳥Ⅰ新相～Ⅱにさかのぼる確実な備前産須恵器の例を新たに提示し、飛鳥時代前半の時点で一定数の備前産須恵器が宮都へ供給されていたことを指摘した。飛鳥浄御原宮期を境とした宮都への大量供給は突如として起こったわけではなく、飛鳥時代前半における生産供給網にのる形で拡大化を遂げたものと捉えられよう。寒風古窯跡群では飛鳥Ⅱ以前をさかのぼる確実な須恵器は現時点で見出しづらいとしているが（馬場 2022：p.54）、さざらし中池窯を含めて邑久古窯跡群全体を俯瞰するならば、飛鳥Ⅰ新相にまでさかのぼっ

て、宮都への供給が実施されていた蓋然性が高い。確実に飛鳥Ⅰにまでさかのぼる備前産須恵器が不明瞭であった中で、本稿で取り扱った大型施文蓋は、それを示す重要な物証となろう。

おわりに

本稿では、さざらし中池窯の資料報告に端を発し、飛鳥藤原地域における関連資料の報告と時期的、系譜的位置づけについて検討した。依然として類例が少ないため不確かさを残す点も少なくないが、大型施文蓋を切り口として飛鳥時代後半における備前産須恵器の宮都への大量供給の前史を描くことができた。

一方で、型式学的な特徴がさほど顕著でない通有の須恵器の生産流通状況に復元にあたっては、考古学的な検討とともに理化学分析も併用していくことが望まれる。理化学分析のさらなる蓄積を図りつつ、今一度検討することが必要であろう。これについては他日に期したい。

謝辞

本稿作成にあたっては、下記の個人、機関にお世話になりました。

その負うところを記し、ここに御礼申し上げます。

相原嘉之、江口直輝、大谷博志、尾野善裕、玉田芳英、長谷川透、山藤正敏、若杉智宏、若松孝史、明日香村文化財課、瀬戸内市文化観光課、総社市観光プロジェクト課、（五十音順、敬称略）

本稿は 2022～23 年度岡山大学文明動態学研究所共同研究「古代備前産須恵器の産地同定法確立と生産流通復元にかんする文理横断型研究」の成果の一部である。

注

- 1) 当調査の東側で 1979 年に検出された SD02 は、この SD367 の東延長部分にあたる。したがって、本来であれば SD02 出土土器も含めた検討が不可欠だが、中層と上層にかんする層位の対応関係が厳密には不明確であるため対象外とした。ただし、SD02 における各層位の出土遺物の時期的位置づけにかんして、SD367 の検討から導かれた理解と大きな矛盾がないことは確認している。
- 2) 論旨からはそれるが、田中遺跡 SD055 は、報告では慎重な書きぶりながらも柵列や掘立柱建物とともに、舒明天皇の宮である田中宮と時期的に一致するとの見方が示されている（奈文研 1976）。しかしながら、今回の整理を通じて SD055 出土土器は田中宮の存続時期とは合致しないことが明らかとなった。当遺跡の土地利用について、再考を要するものといえる。

- 3) 飛鳥Ⅲは飛鳥Ⅳの土器が有する様相の一部と重複することから、明確な時間幅をもたない可能性もある（尾野 2019、森川 2019）。そういった意味では、飛鳥時代後半にも大型施文蓋が存在した可能性も残されるが、確実な共伴資料から時期比定される資料はすべて飛鳥Ⅰ新相～飛鳥Ⅱに位置づけられる点は看過できない。なお、飛鳥Ⅴに比定される藤原宮 SD1901A の土器群の中にも大型施文蓋に類似した細片が含まれている。これについては、若杉智宏氏にご教示を得た。
- 4) 難波宮では飛鳥藤原地域に先行する飛鳥時代前半の時点で一定量の備前産須恵器が流入していた可能性もある。
- 5) 当古墳は 7 世紀後半～8 世紀に築造されるなど、寒風古窯跡群の最初期に位置づけられるわけではない。
- 6) 新田氏の報告掲載の杯 G（PL.37－53）の図面は、PL.37－56 の誤掲載であることを確認した。

引用・参考文献

- 相原嘉之 2019「西橋遺跡出土土器」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、pp.20-33
- 宇垣匡雅 1995「2 号墳の特色」『川戸古墳群発掘調査報告書』大原町教育委員会、pp.89-90 <http://doi.org/10.24484/sitereports.16302>
- 大阪市文化財協会編 2010『難波宮址の研究』第十六
- 大原町教育委員会編 1995『川戸古墳群発掘調査報告書』<http://doi.org/10.24484/sitereports.16302>
- 大脇潔ほか 1980『日本古代の鷗尾』飛鳥資料館
- 大脇潔 2007「奥山廃寺再々考」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』真陽社、pp.695-716
- 小田裕樹ほか 2010「甘樫丘東麓遺跡の調査—第 157・161 次」『奈良文化財研究所紀要 2010』奈良文化財研究所 <http://doi.org/10.24484/sitereports.14512>
- 小田裕樹 2012「食器から見た「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢』Ⅳ 奈良文化財研究所、pp.265-290
- 尾野善裕 2018「藤原宮朝堂院第二次整地土出土土器の再検討」『奈良文化財研究所紀要 2018』、pp.50-51 <http://doi.org/10.24484/sitereports.65336>
- 尾野善裕 2019「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて—飛鳥・藤原地域を中心に—」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、pp.1-18
- 尾野善裕・森川実・大澤正吾 2016 飛鳥地域出土の尾張産須恵器『奈良文化財研究所紀要 2016』、pp.94-106 <http://doi.org/10.24484/sitereports.62863>
- 尾野善裕・森川実・大澤正吾 2017「飛鳥地域出土の湖西窯産須

- 恵器」『奈良文化財研究所紀要 2017』、pp.176-181 <http://doi.org/10.24484/sitereports.65335>
- 柏原市教育委員会編 1993『柏原市遺跡群発掘調査概報』1992 年度 <http://doi.org/10.24484/sitereports.18125>
- 亀田修一 2006「さざらし中池窯跡」『邑久町史考古編』、p.734
- 奈良国立文化財研究所 1995『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ—水落遺跡の調査—』
- 奈良文化財研究所 1976「田中遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6 <http://doi.org/10.24484/sitereports.14649>
- 奈良文化財研究所 1980「川原寺西南部の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』10 <http://doi.org/10.24484/sitereports.14653>
- 奈良文化財研究所 1992「飛鳥池遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22 <http://doi.org/10.24484/sitereports.14665>
- 西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』平凡社、pp.447-471
- 新田宏子 2019「播磨・備前の 7 世紀須恵器編年」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、pp.116-137
- 箱崎和久・西川雄大 2002「奥山廃寺（奥山久米寺）の調査—第 114—8 次」『奈良文化財研究所紀要 2002』、pp.72-74 <http://doi.org/10.24484/sitereports.14504>
- 花谷浩・黒崎直・西口壽生 1997「寺域西南部の調査（1996-2 次）」『奈良国立文化財研究所年報 1997-Ⅱ』奈良文化財研究所、pp.67-71 <http://doi.org/10.24484/sitereports.14859>
- 馬場昌一 2022「寒風古窯跡群における須恵器の様相に関する小考—杯の形態構成の変化と時期的位置づけ—」『半田山地理考古』第 10 号、pp.33-56
- 道上祥武・廣岡孝信・白石純・清野孝之 2022「奈良の鷗尾」『古代瓦研究』XⅠ 奈良文化財研究所、pp.3-29 <http://doi.org/10.24484/sitereports.130295>
- 森川実 2019「飛鳥時代における須恵器食器の法量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、pp.34-53
- 森暢郎 2018「装飾埴と須恵器編年」『待兼山論集』Ⅲ 大阪大学考古学研究室、pp.627-640

(Received August 30, 2023; accepted December 15, 2023)